かしきだましの星（姫路市木場）

むかしは漁船〈ぎょせん〉に時計をつんでおりませんので、漁師〈りょうし〉さんたちは時刻を知るのに、大へん苦労したと思います。昼であれば太陽を手がかりにして、太陽がま南まできたので十二時だな、夜であれば、オリオン座が西の山に入りかかったので、もう朝四時ごろになったなとか、いろいろとくふうをこらしました。

そのひとつに、金星があります。夜明けの東の空に金星が上ってくると、船ではかしき（調理する人）が起こされて朝食を作ります。しかし、まいにちのことですから、かしきがたおれて（つかれて）しまうというので、金星のことをかしきだおしの星と呼んでおります。

ある日のこと、東の空に明るい星が上ってきました。夜の運転当番の人は、

「あっ！かしきだおしの星が上ってきたぞ、夜明けもすぐだぞ。はようかしきを起こしてごはんを作らんと、朝ごはんがおくれるぞ。」

と、いってかしきをたたき起こしました。かしきは寝ていたところを急に起こされて、ねむけまなこをこすりながら甲板〈かんぱん〉に出てみますと、明かるい星が東の空に出ています。

「わあ、はよう朝のごはんを作らんと間にあわないぞ。」

と、あわてて朝食をつくりました。しかし、食事のよういができあがっても、少しも東の空は夜があけてきません。

「これはおかしいぞ。」

と、思って東の空をみますと、さきに上っていて金星と思った星の下から、ほんとうの金星が上ってきました。

「あっ、まちがって見ていたのか、それにしてもかしきだおしのほしとよくにているなあ、うまくだまされたぞ。」

それから後、この星（おおいぬ座のシリウス）のことを、漁師さんたちは、かしきだましのほしと呼んで、金星とまちがえないようにしたということです。